

## ポスターB-4

## ポスター発表(実践)

**子どもの意欲を高める母語指導の実践**  
—語学相談員・学校・家庭の連携を通して—

伊藤敦子(小牧市立大城小学校)

Barbara sakae Bevilacqua kono(小牧市ポルトガル語学相談員)

本校は小牧市東部に位置し、外国にルーツのある子どもたちが児童数の約15%を占めている。子どもたちは学校では日本語で会話しているが、家庭では母語で会話するというように、日本語と母語を使い分けている家庭が多い。しかし、保護者が母語保持を意識して使い分けていることは少なく、話す相手によって母語と日本語を使い分けている家庭もある。例えば、日本語が分からない両親とは母語で話しているが、日本の学校に通っている兄弟とは日本語で話す場合である。このような言語環境で育った子どもたちは、学年が上がるにつれて保護者とだんだん意思疎通ができなくなってくる。そのため、問題が起こったときにも家庭内で十分な話し合いができず孤立してしまう。

そこで、母語も日本語も豊かな子どもを育成するために、家庭と学校が連携して母語指導にあたることによって、子どもたちの母語保持やモチベーションアップが計れるのではないかと考えた。

本校では以前から母語指導を行っていたが、年間の指導計画はなく指導内容も文字練習や会話だけで終わることも多かった。そのため、母語指導の時間を楽しみにする子どももいたが、母語指導に意義を見出せない子どももいた。そこで、昨年度から子どもたちが意欲をもって取り組める母語指導を目指して、語学相談員と担当教員が協力して年間指導計画を立案し、指導内容を検討するようにした。指導内容を検討する際には母語指導で学んだことと学校生活がつながるように、学校行事や教科内容等について関連性を持たせるようにした。また、家庭と協力して活動する内容を盛り込み、運動会の招待状づくりやプログラムアナウンス活動といったテーマについて、家庭でも母語で話し合えるように工夫した。そして、1時間の授業では話す・読む・書く・聴くの4技能が実施できるように授業展開を工夫した。授業で使用する教具や教材は、子どもの年齢や母語レベルに合わせて準備して指導実施した。

昨年と比較すると、子どもたちが母語で話したり書いたりする内容に深みや成長が感じられるようになり、学習意欲も向上した。一方、子どもたちを取り巻く大人たちにも変化が表れた。担任は、様々なルーツを持つ子どもたちがお互いの母語を知る機会を広げるために、互いの言葉を紹介する場を設けるなどの働きかけを行うようになり、保護者は子どもに対して積極的に母語で会話するようになった。今後も充実した母語指導を継続していきたい。